

PI-Forum

Vol. 4. Winter, 2009.

発行：非営利特定活動法人 **PI-Forum**

<http://www.pi-forum.org/>

小さな政府の時代における「参加」

公共事業から日常生活へ

PI-Forum 理事 松浦正浩
(東京大学公共政策大学院 特任准教授)

今回の **PI-Forum** 誌は食と医療をテーマとした参加と合意形成の実践についての記事を掲載した。敢えて目新しいテーマを選んだということもあるが、それ以上に、最近の興味深い「参加」の取り組みが、これらの分野でしか見つからなかった、というのも本音である（強いて言えば、今回掲載していない事例として、地球環境をテーマとした興味深い参加の実践がいくつかあるようだ）。

これまで **PI-Forum** 誌の記事で扱われてきた題材は、都市計画、公共事業、ローカルな環境保全活動といったものが多いが、それらの分野における参加は最近、衰退しているのだろうか？統計があるわけでもないのだから、確たることは言えないが、確かに、流域委員会や道路関係のパブリック・インボルブメントがこぞって実施された「ミレニアム」前後と比べると、何か落ち着いてしまった感じがする。しかも、政権与党や首長によるトップダウンの意思決定がもてはやされる時代になってしまった。では衰退しているのか、といえば、そこまでは言えないだろう。新たな動きが全くないわけではない。むしろ案件の数は増えているかもしれない。ただ、キラメキがないというか、何かハッとさせられる現場のハナシを耳にしないのである。

公共事業分野の停滞感に比べると、今回取り上げた食や医療をテーマにした参加は、なかなか興味深い。なぜだろうか。従来、食や医療に関する政策課題は、専門家である学識経験者、官僚、医師などが検討し、必要に応じて消費者団体、患者団体の代表が参加すれば、一定の合意形成が図られていたのだろう。ところが最近になって、食品偽装や医療事故といった問題が頻繁に報道され、食と医療のガバナンスに対する公共の信頼が低下した。結果として、新たに見つかった制度の空地 (institutional void) を埋めるべく、挑戦的な参加の実践が始まりつつあるのだろう。そこでは、経験もしがらみも少ないので、(すでに制度化段階に入っている公共事業領域との比較で) 創造性が発揮されるのだろう。

もうひとつの考え方として、専門家の正統性に対する懐疑の高まりと対策としての参加の導入は、社会全般でみられる長期トレンドであって、公共事業の分野で先行的にこのトレンドが発現し、最近になって、食や医療といった領域でもようやく発現するようになったと解釈することもできよう。では、なぜ、公共事業→食・医療というシフトが起きたかを考えてみると、やはり、行政改革などの旗印のもと、政府が担う役割が縮小されてきたことが影響しているのだろう。公共事業が縮減し、民間が担う役割が増大するにつれ、国民の日常生活とつながりの深い民間事業や関連する法規制へと、国民の関心と参加の対象が移行しているのだろう。

さて、今回取り上げた事例は、単に目新しい参加事例としてではなく、むしろ食と医療という不特定多数の国民にかかわる分野における参加の特徴は何か、従来の公共事業などに関する参加と変わらない共通点は何か、そして抜本的なパラダイムシフトへとつながりうる先進性は何か、といった点に注意しながら読み進めていただきたい。これらの疑問にこたえることで、5年後、10年後にわれわれを待ち構えている「参加」の地平線(すなわち、ビジネスチャンス)が明らかになるのではないかと思う。

—目次—

小さな政府の時代における「参加」：公共事業から日常生活へ(松浦正浩) 1

招待論文

上流段階における科学技術への市民参加の可能性：食品ナノテクをめぐる三つの対話「ナノライ」(三上 直之) 2

食品安全規格の国際調和をめぐる戦略上の諸課題：日本の食品安全確保を目的として(松尾 真紀子) 8

ユニバーサルデザインを目指した参加型建築設計の試み(松田 雄二) 13

素人の視点で、科学技術の問題を議論する「場」をつくる：「ママのためのサイエンスカフェ」の試みから(八木 絵香) 17